マルクス主義者でないものの認識のしかた

三年ののち、フランスのナポレオン帝国の崩壊の前夜にマルクスは、「きわめて興味ある」社会運動がおこっていることを確認して、「パリ人たちは、さしせまった新しい革命の仕事を準備するために、彼らの最近の革命的過去を本式にまなびはじめている」と、**まさに狂喜して**かたっている。そして、過去にこういう評価をくだすさいにあきらかにされた諸階級の闘争を述べたのちに、マルクスはつぎのようにむすんでいる（56 ページ)。「このように、歴史の魔女の釜の全体が煮えたぎっているのだ。**わが国**」（ドイツ）「で、ここまですすむのはいつのことだろう！」〔1866 年 3 月 3 日付の手紙〕

これこそ、ロシアのインテリ・マルクス主義者たち――懐疑精神のために虚弱になり、学者ぶりのために愚鈍になり、懺悔ばなしをこのみ、すぐ革命に倦みつかれ、革命を埋葬してそれを立憲的平凡事によっておきかえる日を、祭日かなにかのように夢みている彼ら――が、マルクスからまなぶべき事がらである。彼らはこの理論家――プロレタリアの指導者から、革命にたいする信念を、労働者階級に彼らの直接の革命的任務を最後までまもりぬくように呼びかける能力を、また革命が一時失敗しても弱気な泣きごとをゆるさない精神の不屈さを、まなびとるべきであろう。

マルクス主義の物知りたちは考える、――そんなことはみな倫理学のおしゃべりであり、ロマン主義であり、現実主義の欠如である！　と。いや、諸君、これは革命的理論と革命的政策との結合である。それなしにはマルクス主義が、ブレンターノ主義、ストルーヴェ主義、ゾンバルト主義になってしまう、そういう結合である。マルクスの学説は、階級闘争の理論と実践を、一つの不可分の全体に結合した。そして、客観情勢を冷静に確認する理論を、現存するものの弁護論に変質させてしまい、革命が一時衰退するたびにできるだけはやくそれに順応しようとつとめ、できるだけはやく「革命的幻想」をなげすてて「現実的な」日常の茶飯事にとりかかろうとつとめるような人は、マルクス主義者ではないのである。

マルクスは、もっとも平和的な、彼自身の表現によれば「牧歌的」におもわれる――また（『ノイエ・ツァイト』の編集者の言葉によれば）「みじめにも鈍感な」時代にも、革命の近いことを感知することができ、プロレタリアートを**たかめて**彼ら自身の先進的な、革命的な任務を自覚させることができた。マルクスを俗物的に単純化するわがロシアのインテリゲンツィアは、もっとも革命的な時代にも、プロレタリアートに受動性の政策、「流れにしたがって」従順についていく政策をおしえ、流行の自由主義政党のもっとも動揺的な分子を小心翼々と支持することをおしえているのだ！

第 12 巻 P105~106『マルクスのクーゲルマンへの手紙のロシア語訳序文』1907 年 2 月

ポイント

インテリ・マルクス主義者たちは、懐疑精神のために虚弱になり、学者ぶりのために愚鈍になり、懺悔ばなしをこのみ、すぐ革命に倦みつかれ、革命を埋葬するのではなく、マルクスから革命にたいする信念を、労働者階級に彼らの直接の革命的任務を最後までまもりぬくように呼びかける能力を、また革命が一時失敗しても弱気な泣きごとをゆるさない

精神の不屈さを、まなびとるべきであろう。

マルクスの学説は、階級闘争の理論と実践を、一つの不可分の全体に結合した。客観情勢を冷静に確認する理論を、現存するものの弁護論に変質させてしまい、「現実的な」日常の茶飯事にとりかかろうとつとめるような人は、マルクス主義者ではない。

マルクスを俗物的に単純化し、プロレタリアートに受動性の政策、「流れにしたがって」従順についていく政策をおしえ、流行の自由主義政党のもっとも動揺的な分子を小心翼々と支持することをおしえてはならない。